The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Try, try, try again.
Author(s)	田所, 宏行
Citation	大阪大学低温センターだより. 1979, 27, p. 21-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8787
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

談 話 室

Try, try, try again.

理学部　田 所 宏 行（豊中 4250）

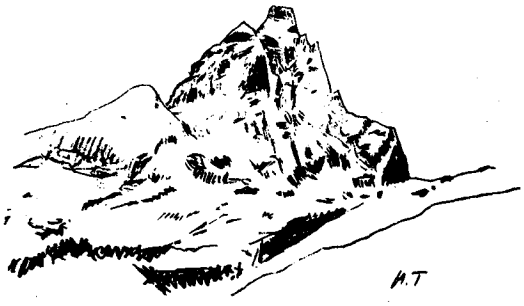
入試委員会で長谷田泰一郎先生と雑談をしたのがきっかけになって，この小文を書くように言われた。小生らは液体ヘリウム温度で高分子のラマンスペクトルを測定して，低温センターにはずっとお世話になっているので書かしていただくことにした。

小生は１９６４年に仁田先生のお供をして渡米した際，Wiley-Interscience の Chemistry editor である Dr. Immergut より "Structure of Crystalline Polymers" の題名で本を書くようにとの申出でを受けた。その後，これに着手したのであるが，中々仕事が進まないまま，大学紛争の時期もありそのままになっていた。丁度５年半前の１９７４年１０月，高分子討論会の時京大工学部の梶慶輔さんに日本語で本を書くことを強く推められたのが動機となり，むしろまず日本語の本を書いてみようと発心をした。その為には時間を作らなければならない。そこで考えたのが早起きである。朝５時に起きて，７時か７時半頃まで仕事をする。これは有効な時間帯の phase をずらしただけで，早く寝ることになる。始めの頃はしばらく眠かったが，次第に慣れて来た。全く disturb されないで，full に仕事に集中できるのが最大の長所である。早寝，早起きは旧海軍の伝統で，小生にとっては戦前の習慣に戻っただけのことである。

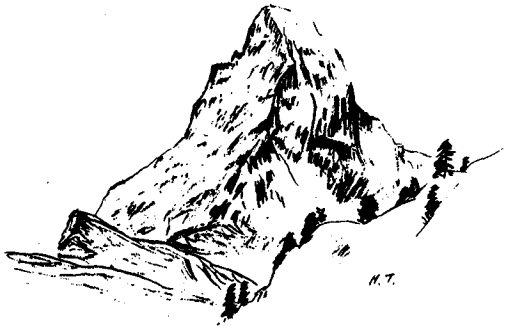
以来，風邪を引いた時以外は元旦も例外ではなくこの日課を続けて来た。そのおかげで４００字詰1,８００枚位の原稿「高分子の構造」が出来上り，１９７６年９月に出版された（化学同人，５１２頁）。仁田先生に途中で執筆について申上げた処，「あなたらしいユニークな本になるように」とのお言葉を頂き，それから当分の間お目にかかる度に同じことを言って下さった。御期待に沿うように努めなければならないと思った。

本を書くということは別としても日頃忙しい方々には時間の生み出し方の一つとして早起きをお推めしたい。冬の朝，ストーブをたくと閉め切った書斎の空気が汚れてくる。これについては関集三先生と藤田博教授がクリーンヒーターを推めて下さった。ガスの燃焼に使われた空気を熱交換してすべて室外に出す形式で，automatic に温度を調節してくれるのでまことに快適である。どこからもピーナッツをもらったわけではないが，早起きには必需品のように思われるので併せて紹介しておく。

本の体裁のことも考えて色々の書物を当って見た。１９７４年にノーベル化学賞をもらった Paul J. Flory 教授の Statistical Mechanics of Chain Molecules の扉の次の sheet には To Emily, my wife と書いてある。尊敬する大先生であり，夫人にも家内共々大変お世話になったが，これを真似するには少々照れくさいので今回は遠慮した。その次の頁に Benjamin Franklin の格言が引用してある。それで思い浮んだのが小生の愛読書ウインパー（Edward Whymper）のアルプス登はん記である。ウインパーは各章のはじめに色々な格言を引用している。ウ



第１図　チェルビーニア(イタリー側、南麓)より見たマッターホーン。ウインパーは、はじめ６回を向って左側の南西稜より登ろうとし、７回目は右側の東壁を試みた。



第２図　ツェルマット（スイス側、北東方）より見たマッターホーン。中央の稜がウインパーが８回目に登頂に成功した北東稜で、左半分が東壁である。

インパーはマッターホーンに１８６１年より始め６回までは南西稜のルート（第１図）が適当と考えて登はんを試み，７回目には東壁を試み，８回目には北東稜にルートを変えて（第２図），1865年７月１４日初登はんに成功した。この間にはチンダル現象で有名なTyndall教授との激しい競争があった（第１図の頂上のすぐ左側のとがった処をTyndallピークという）。その第２回目の試みの章頭に次の格言がのせてあることはウインパーの気持がよく判るような気がする。

"'Tis a lesson you should heed,
　　Try, try, try again.
If at first you don't succeed,
　　Try, try, try again.
Then your courage should appear,
　　For if you will persevere,
You will conquer, never fear,
　　Try, try, try again."

Hickson

浦松佐美太郎先生の訳書（岩波文庫）には次のように訳されている。

「繰返し，繰返し，繰返し試みよ。
　これこそは，汝の守るべき教訓なり。
始めに成功することなくも，
　繰返し，繰返し，繰返し試みよ。
されば，勇気も湧き起こるべし，
　たゆまず屈せず，止むことなくば，
遂に勝利をうべし。恐るるなかれ。
　繰返し，繰返し，繰返し試みよ。」

この格言は如何なる分野にもあてはまるであろうが，特に小生らの地味な学問分野（ポリエチレンオキシドの結晶構造と最近決定したアイソタクチックポリメタクリル酸メチルの二重らせん構造はいずれも１０年がかりの仕事である）においてそのまま適用されると感じ，小生の本の扉の裏に引用したいと考えた。これは読者に対してという僭越な気持からではなくて，小生自身が日頃守ろうと努めているという意味であって，若し皆様の共感をうれば幸である。浦松先生に引用の許可をお願いした処，大層丁重なお手紙を頂いた。上記の原文は訳書にはのっていないので，Try， try，･･･ の末，篠田軍治先生が美津濃KKの大島文庫で，梶さんが京大図書館で１８７１年版の原著よりコピーをとって送って下さった。このような次第で「高分子の構造」に上記の英文，邦訳共にのせることができた。また，これを小文にまとめて「早起きのすすめ」の題で近畿化学工業会の会誌にのせていただいた。

「早起きのすすめ」の別刷を作ってもらい，小生と専門の同じ人にも，専門の異なる人にもその時に応じて差上げた。中には結婚式の祝辞に用いたなど，多くの人々が共鳴して下さり，特に会社の人事関係の方々に喜ばれ，そのおかげで就職がスムーズに行った学生も数名ある。

一つの面白い例は，いい学生なのに面接で何度もはねられた小生の研究室員があった。学問以外の本は何を読んでいるかと聞くと漫画を読んでいるというので，ウインパーの「アルプス登はん記」を読んでみないかと推めた。すると彼は大層興味を持ち，小生の５万分の１の地図を貸してやり，$^{2}/_{3}$位まで進んだ処で試験を受けに行った。日曜日の夕方，彼より合格したとの電話があり，翌日「アルプス登はん記」を読んだことが役立ったかどうか聞いた処，大いに役立ったとのことであった。

その後，知りたいと思ったのは作者の Hickson とはどういう人かということである。ウインパーの原著にもinitial は出ていない。はじめ英文学に関係のある知人数名に調べてもらったが全く判らなかった。関集三先生は阪大の図書館長をしておられた関係で図書館の参考掛で調べてもらったらと言われた。それで早速図書館にお願いした処，2,3 日して判ったとの電話があった。詩の内容から著者名を引く辞典がある由である。William Edward Hickson が正しい名で，今度は人名で引く辞典があり，これによれば英国の社会教育の発展と音楽教育の普及に尽した人であるということが判った。以来図書館を高く評価している。

小生の日本語の本は１９７６年９月に発行になり，最初の１年間に 1,０７１冊売れ，その後少しづつ売れ，近く第２刷をしなければならなくなっている。教科書ではないので，毎年沢山売れるというわけには行かないのであろう。

本文の冒頭に書いたWiley-Interscience の本については，化学同人より小生が自分で英語に書き直すのであれば，別の本と考えてもらってよいとの有難い申出でを受けた。それでWiley-Interscience に永い間そのままになっていたが，今でもよければ書ける由連絡した処，書いて欲しいという返事を受けとった。英語で書くのが１日１頁しか進まないという速度から次第に早くなって１日２頁というように順調に進んだ。文章の言いまわしに苦心したことは数限りないが，その他，たとえば直方体というような簡単な用語が判らないことがあった。普通の和英辞典には勿論，研究社の大和英辞典にも無く（最近の改定版には出ている），理化学辞典の新版にも無く，戦前の理化学辞典ではじめて見つけたということもある。新しい理化学辞典では項目が多くなりすぎてこのような語は抜いて了ったのであろう（これはrectangular parallelepiped という）。

英文についてはWileyで直してくれることになっていたが，それまでに出来るだけのことをしておきたいと考えていた。丁度１９７６年１２月より１９７７年２月の間，ユタ大学のC.H.Wang 教授が分子研の研究員として阪大にも滞在された。それで彼に事情を話し，序文，目次と第３章までをお渡しした。沢山に手を入れた後，翌日に返してくれ，彼もポリマーのことを勉強したいので，終りまで見て下さるとのことで，神の助けとばかり有難かった。事実，翌年５月頃までにわたって原稿の最後まで見て下さった。Wang教授は自分はこの分野の専門家ではないので，これから章毎にその道の専門家に見てもらうことを推めるとのことであった。それでC.W.Bunn 博士（高分子X線解析の開発者，現在引退され家でチェロを引いておられる由），P.H.Geil教授およびJ.L.Koenig教授（いずれもCase Western Reserve University．それぞれ高分子morphology および高分子分光学の権威），E.M.Barrall II博士（IBM，高分子分析の権威）などの方々に，もし興味があればコメントを頂き度いとして，また第３章までをお送りした。すべての方々が大層興味があるので後の章も送るようにとのことで，その人毎に適当な章の原稿のコピーを送った。原稿は沢山の親切なコメントが書き込まれて帰って来た。X線で有名なL.E.Alexander 教授もそのお１人であるが，実は小生は同先生には面識が無い。神戸大学工学部の中前助教授に是非送ってみたらと推められたのでお送りした。先生は直接会っていなくても論文の上で何度も会っているので同じようなものだと言って下さり，引退して新しいお宅に移られる忙しい時にも拘らず丁寧に直して下さった。いずれの場合にも，往時中学時代に受けた英語の添削を思い出した。全く親切な先生方のお陰で原稿は予想以上早くまとまって行った。私の序文の中でウインパーのことを書いた部分にAlexander 教授が“This is good！”と書いておられ，共鳴して下さったのをうれしく感じた。

本は多くの人々の御助力や激励のおかげで本年５月に出版された。中でもP.J.Flory教授がForeword を書いて下さったことは大変光栄である。先生は原稿全文に目を通した上で書きたいと言われ，お忙しい先生に恐縮だと思いながら全文のコピーをお送りした。S.Krimm 教授（ミシガン大学，高分子分光学の権威）にこのForewordを見せた処，thoughtful（小生の原稿をよく読んで充分考えて書いたもの）でwith dignity （風格のある）であり，Flory教授でなければ書けないものであると言われた。また本書の出版を仁田勇先生をはじめとして多くの方々が心より喜んで下さった。最初依頼を受けた１５年前には英語で単行本を書くことは夢のような話であったが，やはりTry， try，･･･ で着実にやって行けば出来ることだと身を以って感じた。